

Title	吉祥図像としての麻姑について
Author(s)	毛, 嘉琪
Citation	デザイン理論. 2024, 84, p. 92-93
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97671
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

吉祥図像としての麻姑について

毛 嘉琪 京都女子大学大学院在学

はじめに

東洋美術の意匠における人物の図像は長い時間をかけて醸成され、定型として完成された集合知である。これらの図像は時代や社会背景によって変化し、採用頻度が変わることもしばしばある。現代の日本では漢詩漢文を以前ほど学ばなくなり、東洋美術にあらわれる中国人物の判別が不能、もしくは誤認されていることが散見される。本発表では吉祥図像としての麻姑が普及した歴史背景、および社会的要因による採用について検討した。

麻姑の図像とその記述

麻姑とは中国の神話に登場する仙女である。若く美しい娘で鳥のように長い爪をしている。長寿の象徴として西王母の誕生祝いに麻姑が美酒を贈る「麻姑献寿」は絵画の題材にとられることが多い。台北故宫博物院が所蔵している宋の馬和之作《麻姑仙像》は典型的な麻姑図像としてあげられる。髪を半分を結び上げ、半分下ろしており、裾の長い漢服を着ている。爪の長い手は鋤を掛けて、鋤の棒から四季の花々や霊薬、そして酒入用の瓢箪がたくさん繋がれている。

麻姑に言及した最古の文献とされているのは東晋(265-420)の『神仙伝』である。その後、唐(618-907)の顔真卿(709-785)作『麻姑仙壇記』、唐末の杜光庭(850-933)の『墉城集仙録』、宋(960-1279)の『太平御覽』、元(1271-1368)の『歴世真仙体道通鑑後集』、明(1368-1644)の『麻姑山志』、清(1644-1912)の『南城県志』などに麻姑についての記述がみられる。

時代が下るごとに詳細になる麻姑神話

麻姑は『神仙伝』巻三の「王遠」の項で脇役として登場し、後に巻七の「麻姑」の項で主役として登場する。これらの原文において、麻姑に関する内容の略大意は次の通りである。

漢の桓帝という皇帝が世を治めていた頃の出来事である。王方平(王遠)という仙人が、仙骨を有する蔡経という人の家に降り、麻姑を迎え入れた。彼女は年のころなら十八、九の美女であり、ツムリの天辺にはマゲを結び、残りの長い髪はみなそのまま腰の辺りまで垂らしていた。麻姑の手の爪はまるで鳥の爪のようだったので、蔡経はひそかに心の中で「背中が痒い時、彼女の爪で掻いたならどんなにか気持ちがいだろう」と思った。すると王方平は、その思いを察してすぐに蔡経の背を鞭打って叱りつけた。「恐れ多くも麻姑は神人であるぞ。お前ごときがなんということを思いつくのか」と。

この記述において、王遠と挨拶する麻姑は「五百年ぶりですね、その間に滄海桑田を3度見てください」と言う。つまり麻姑は海が桑畑になり、桑畑がまた海になることを3度見るくらいに長生きをしているという意味である。このことから長寿の仙女としての神格が定着されたのだと思われる。鳥のような長い爪を持つが、凡人がその爪で背中を掻きたいと思われたら罰が当たるという逸話である。この話が転じて日本では背中を掻く道具が

「麻姑の手」と名付けられ、やがて「孫の手」になったとされている。

晋代に登場した時は「爪の長い長生きの仙女」だった麻姑だが、唐代には江西省撫州南城県の山で修行し、仙籍に入ったという具体的な地名があげられた。元代には「王遠（王方平）の妹」となり、明代には出身地が安徽省と定められ、麻秋という人の娘であるという設定が加わった。また、西王母に美酒を献上した逸話が広まり、麻姑酒と名付けられた酒が造られた。清代には、女性の誕生祝いとして「麻姑献壽」図像が流行した。近代には戯曲に、現代ではテレビドラマにも登場する麻姑は、今も中国で一般的に知られている仙女である。

麻姑図像の特徴

台北故宮博物院所蔵の宋代・馬和之作《麻姑仙像》は麻姑図像の基準作と言える。本作には、①若い女性（一人）、②髪は上半分のみ結び下半分は下ろしている、③鋤、④裾の長い漢服を着ている、⑤長い爪、⑥美酒の入った瓢箪、⑦花や果物・灵芝などの入った籠、という7つの図像的特徴を見せている。明代以前に描かれた麻姑はこれらの内、特徴的な髪型、裾の長い漢服、長い爪を有することが多い。しかし、髪飾りや玉器などの工芸品で表現される際は技術的な問題でディテールを表現できないか、或いは曖昧になってしまう傾向がみられる。さらに時代が下ると、髪型や長い爪、若い娘という特徴もあやふやになり、絵画・工芸品共に女性の図像を麻姑と特定することが難しくなっていく。

麻姑と毛女

毛女は最古の神仙伝記集である『列仙伝』に記され、長寿を象徴するという意味では、かつては麻姑よりも重要な立場にあった仙女である。『デザイン理論』83号に掲載された拙稿「毛女図像の研究——大阪市立東洋陶磁美術館蔵《五彩仙人図

盤》を題材に——」で述べた通り、足が見えているということが毛女の特徴である。毛女は明代までは長寿を象徴する女仙の代表格だったが、清代になると突如衰退した。纏足が普及した清代では、女性の足は性と直結するようになり女性の足を描写できなくなったことが、この背景にあると考えられることができる。

本発表では、こうして空いた長寿の女仙という枠に入ったのが麻姑であるということを目指した。裾の長い漢服を着て、足が見えず、手が綺麗な麻姑は、明代までの毛女のように清代から現代にいたるまで伝承されている。清代を中心に起こった毛女から麻姑への転換の過程で、この二種の仙人の図像やその判定にいくつかの興味深い変化が起こった。足が隠された毛女が麻姑とされたと考えられる例は少なからず確認できた。また、「靈獸を従わせる」や「群体で行動している」などの毛女の特徴をもった麻姑が描かれるといった例も存在することが分かった。

他方、日本においても毛女や麻姑が描かれた作品が制作された。日本では女性の足を描くことに抵抗がないため、麻姑も毛女も足を見せていることが多い。そのため、毛女と麻姑が混同される主たる理由は、毛女の認知度の低さにあると考えられる。結果として、毛女の特徴を有する作品でも麻姑とされているものが少なくない。

清代における毛女図像の衰退と麻姑図像の流行は、美術が時代の流行や社会の変化に敏感に反応し対応していた好例と言える。特に日中間の描かれ方の違いは、美術がそれを受容する社会にふさわしい形に変化することを如実に表している。また、異なる時代・異なる文化における女性の表象という視点からも興味深い事例であるといえる。